ブックレビュー

『エジプト日本文化学術関係史』

両国間関係の発展史を振りかえり

今後の専門家育成のための資料として

富澤規子

今年2026年9月16日の日刊アハラム新聞一面に日本語の書かれた広告が大きく掲載された。カラム・ハリール氏による著書『العلاقة الثقافية العلمية المصرية اليابانية دراسة تاريخية تحليلية』、添えられた日本語タイトルは『エジプト日本文化学術関係史—歴史分析研究—』である。

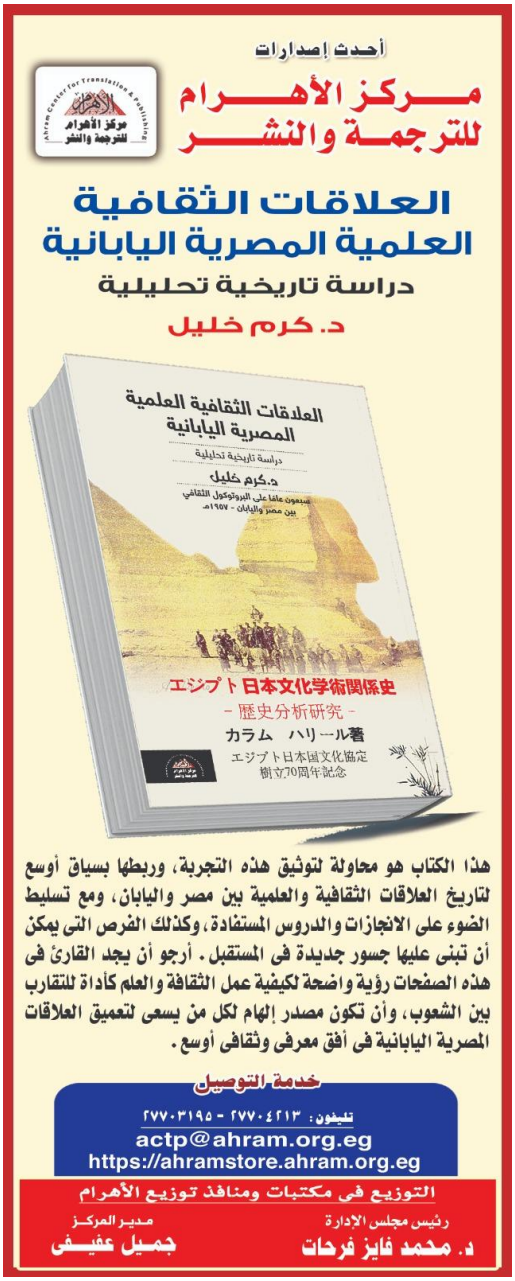

الأهرام
فلسطين قضيتنا المركزية
السيسى لـ «أبو مازن»: جهود مصرية مضنية لإقامة الدولة المستقلة وتنفيذ اتفاق وقف الحرب فى غزة
تعزيز التعاون الاستثمارى مع تنزانيا
الرئيس: تنسيق فى الحالات ذات الاهتمام المشترك
الحكومة تعتمد الخطة التنفيذية لـ «ملكية الدولة»
مصر تدين محاولة استهداف مكة المكرمة
اليوم
330 مليون قدم مكعب زيادة مرتقبة فى انتاج الغاز
أوروبا تتحدى ترامب
«الفرعنة» يستعد لأنجولا وجنوب السودان
مركز الأهرام للترجمة والنشر
العلاقات الثقافية العلمية المصرية اليابانية
دراسة تاريخية تحليلية
د. كرم شلبى
Currier 19111
FRESH 19059
1/1

2026 年 9 月 16 日の日刊アハラム新聞一面

来年2027年は「日本国とエジプト共和国との間の文化協定」が結ばれてちょうど70周年になり、それを記念してアハラム新聞社翻訳出版センターより刊行された。

これに先駆け、ハリール氏は日本語学会80周年記念論文集『世界と日本の日本語学80周年』への寄稿、2024年の日本語学会80周年記念大会への登壇と両国関係史を振り返る仕事を日本語で日本人に向けて手掛け

ており、これをベースにアラビア語でアラブ人に向けてより深く掘り下げた解説をしているのが本書である。



広告部分拡大。定価はハードカバー版で 1000EL、ソフトカバー版で 500EL。

更にさかのぼれば、ハリール氏は2011年に当時学科長を務めていたカイロ大学日本語日本文学科の国際交流基金賞受賞記講演の参考資料と、2010年同学科主催35周年記念シンポジウム『エジプトにおける日本学ー過去・現在・未来』のための学科データ、2005年から2009年の在日本国エジプト大使館文化参事官当時に作成した1958年から始まる日本へのエジプト人留学生リストなど膨大なデータを作成しており、これらデータの集大成に加え、ハリール氏自身の日本語学科出身研究者としての見聞も詳細に記述されている。

意外に思えるかもしれないが、両国間の文化学術関係史誌を当事者作成によるデータベースをもとに詳細に分析された大手出版社からの著書はこれがエジプト初となるようだ。日本語学科はカイロ大学で1974年設立、アインシャムス大学では2000年設立、それぞれ1学年25名定員、その他の大学での設立はさらに遅い。エジプト人日本研究者の実数は未だ多いとは言えず、両国関係自体が未だ発展の余地があまりに大きい。しかし一方、当事者であるハリール氏がその全貌を詳細に観察し続けることが可能な規模であったため、重要な出来事を漏らすことなく執筆収録され、本文で270ページを超える読みごたえのある資料となっている。

本文に加えて、巻末図録にはハリール氏が文化参事官時代にエジプト外務省資料室から提供された「日本国とエジプト共和国との間の文化協定」の書面画像など貴重な資料が収録されている。

この膨大な情報量を擁する本書が世に出た背景にはエジプトの日本語教育への期待がある。2018年にスタートした日本式教育を取り入れた公立学校「エジプト日本学校 Egypt-Japan School（EJS）」が、2026年度ではエジプト全土で100校開校の目標達成の見込みがたち、うち10校で試験的に日本語の授業も始まった。本書の発行元であるアハラム新聞社翻訳出版センターの責任者ガミール・アフィフィ氏はこの時流にのり、日本に関する書籍をもっと刊行したいと意気込んでいる。本書の出版企画が決まった時、ハリール氏はアハラム新聞社の関連機関であるアハラム・カナディアン大学言語翻訳学部日本語学科長であったこともあり、アフィフィ氏の関心を強く引いたようである。もちろん EJS 設立背景と現在までの運営状況も本書で詳細に解説されている。

2011年の革命で対日本人向け観光産業が冷え込み、日本語学科を卒業しても仕事がないと言われた年月が大変長かったが、これが EJS への注目により変わろうとしている。このレビューを書いている筆者も在留邦人同士の情報で現場ではエジプト人日本語話者スタッフが不足していると言う話を何度も聞いている。この人員不足の背景には日本語学科卒業生がそもそも少ないだけでなく、EJS の現場で求められる語学力が観光産業の比ではない高いレベルなので、志望者の平均的レベルがその要求されるレベルにまだ届かないと言う現状がある。

ハリール氏は度々の日本語教育についての執筆のなかで、学科卒業生が観光産業に流れてしまい専門家が僅かにしか育たなかった世代が長く存在したと指摘している。もし EJS100校にエジプト人日本語話者を通訳者や教員として配置するなら、日本語学科卒業生にとってはかつてない雇用規模となる。EJS 現場希望の採用基準は日本語能力試験（JLPT）の N2合格レベル相当と伝え聞いており、ハリール氏からの聞き取りではカイロ大学大学院日本語・日本文学科修士課程修了条件の中に原則 N2合格があり、学部卒では N2合格者は極少数と言うのが実情である。希望就職先の筆頭が観光ガイドであっ

た時代は会話に重点に置かれ、筆記読解が N2合格レベルに届かなかったのだろうと言うのは容易に想像ができる。そう言った過去の反省も踏まえ、本書からは今後エジプトで専門家と通訳者を増やすためのヒントを数多見出すことができるだろう。

日本国とエジプト共和国との間の文化協定が結ばれてから70年、その間に育った研究者、専門家の数はやはりまだ少ない。一方で親日家の層は大変広く厚く、漠然と日本は友好国であると感じるエジプト人は多い。本書が多くのエジプト人に読まれることで今までの専門家育成方法を改善し、親日家は日本をより詳細に知り文化活動や親善活動のおぼろげな構想を実行に移せる者が増えるだろう。

次の10年の節目で、日本についての専門家はエジプトでどれだけ増えているだろうか。N2合格者がどれだけ EJS に配置されているだろうか。ハリール氏による「文化協定80周年記念図書」の刊行が今から待ち遠しいものである。

Prof. Dr.Karam Khalil Salem（カラム・ハリール・サーレム）



筑波大学にて文学博士取得。カイロ大学名誉教授。元在日エジプト大使館文化参事官。元カイロ大学文学部日本語・日本文学学科長。元アスワン大学言語翻訳学部日本語学科長。元 Ahram Canadian University 言語翻訳学部副学部長兼日本語学科長。令和元年度外務大臣表彰。令和 6 年度旭日中綬章。

単著に『日本文学私的考察　日本文学研究シリーズ全七講』(カイロ大学出版、2019 ～2021年、ギザ)など多数。

共著に「エジプト及びエジプト人研究者における日本語学の80年とこれから」『世界と日本の日本語学80周年』収録（武蔵野書院、2026年、東京）など多数。

富澤規子（とみざわのりこ）

Ahram Canadian University 言語翻訳学部日本語教師。エジプト文化省立大学校アカデミー・オブ・アーツ （Academy of Arts）大学院にて民俗学準修士号取得。おはなし会シリーズに2015年から「アラブのヤシの木（新宿区立大久保図書館主催）」講師。いたばしボローニャ絵本館翻訳おはなしボランティア。

共著に「エジプト及びエジプト人研究者における日本語学の80年とこれから」『世界と日本の日本語学80周年』収録（武蔵野書院、2026年、東京）。